

優秀賞

何気ない通学路

立命館守山高等学校 3年 塚村 夏実

「一緒に帰ろう。」

両親が共働きで家に帰っても一人だった。一人で家にいるのが寂しくてあまり早く家に帰りたくなかった。社交的な性格でもなかったので、友人と遊ぶこともなかった。だから帰りの会が終われば一人で図書室にいた。

本を読めば一人の世界になる。聞こえる音も周りの風景も私が世界を作るための演出の一つになる。一人の世界だから寂しくない。だつて一人だから。

いつも通りの放課後。ただいつもよりも静かな図書室。明日から夏休みだからみんな帰ったのだろう。

一人の世界を作るために本を読んでいた。すると肩に触れられる感覚がした。ふり返つてみると、級友がいた。家は近いが、あまり話したことはない。そして言われた。

「今日私と一緒に帰らない。」

初めて誘われた。心があたたかくなった。思わずうなずいた。

はつきりとした会話はなかった。そして後悔した。

「ああ、もう誘ってもらえないな。」

会話もなく面白くないだろう。心が冷たくなってきた。しかし、次の日もその次の日も誘ってくれた。なぜ自分なんかと、面白くないだろうに。

「二人だと心地良いでしょ。」

思わず聞いたら答えてくれた。「心地良い」と言われて目の前が滲んだ。拭えば光が差したような気がした。

友人と共に歩く通学路。この通学路を歩くと寂しくなかった。これまでは一人の世界にいたから気付けなかった。

帰る時何話をそう。何を伝えよう。通学路を共に歩く。私が一人の世界にこもることはなくなった。

みんなにとつては何もないいつも通っている通学路。私にとつては世界を飛び出した先にある希望の道になった。